

氏 名 加藤 直子

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大甲第 1530 号

学位授与の日付 平成 24 年 3 月 23 日

学位授与の要件 先導科学研究科 生命共生体進化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 公的科学研究機関の経営行動科学的研究

論文審査委員 主 査 教授 佐々木 顕
教授 池内 了
教授 平田 光司
准教授 前田 忠彦
教授 開本 浩矢 兵庫県立大学

論文内容の要旨

本博士論文では、大学共同利用機関で代表される公的科学研究機関の組織目的を、①科学的成果を出すこと、②その成果を社会に還元することと捉え、①においては科学研究者の人的資源管理（組織行動論）の観点から、研究者個人およびプロジェクトチームが成果を挙げていく規程要因を職務満足感のというキーワードで定量的に解析し、②においては公的科学研究機関のオープンキャンパスを通じて行うアウトリーチ活動に焦点を当て、アンケートを通じて得た参加した市民の意識や感想を消費者行動論から科学コミュニケーションの条件を明らかにする、という研究を行っている。本論文においては、①について第Ⅰ部、②について第Ⅱ部にまとめられ、最後に研究全体から得られた知見がまとめられている。

第Ⅰ部においては、「個々の研究者の創造性を発揮しつつ、集団（プロジェクトチーム）としての生産性の向上を促進しうる要因は何か？」という主題を掲げ、公的研究機関に属する研究者への調査票データに経営行動学的手法を適用して成果向上の規程要因を明らかにした。まず第Ⅰ部第1章の調査の概要に続いて、第2章において、「職務満足感と職務達成（成果）との関係」を明らかにするために、職務満足感における士気と研究活動度を変数として取り上げ、職務達成においては論文などの創造的成果と報告書などの定型的成果との間の相関関係を重回帰分析で調べた。その結果、職務満足感と創造的成果に関わる職務達成の間には強い相関があることが明らかになり、それは個人および集団の双方において見られ、特に集団レベルで相関が強化する傾向が観察されることを明らかにした。

続く第Ⅰ部第3章において、「研究グループの成果をいかに高めるか？」を問い、集団の成果を高める規程要因として、研究資源、指導者のリーダーシップ、職場環境、コミュニケーション、コミットメント、会議などの研究環境を考慮し、それらと職務達成との因果関係を構造方程式モデルによって解析した。その結果、職務満足感における士気と研究活動度が研究環境と強い関連があること、なかでもリーダーシップは集団のレベルではより重要であること、会議は効果がないこと、などを明らかにした。第Ⅰ部第4章においては、「個人の職務満足感の規程要因」を探る目的で、第3章と同じ研究環境を変数として個々人の特性を考慮した職務満足感との相関を調べた。そこでは、組織にコミットメントしている意識が重要な規程要因となっていること、パーマネント職員の方が有期雇用職員より職務満足感が高いことなどの結果が得られた。これらの結果から、個人および集団レベルの職務達成感を向上させ研究活動度を高めるための研究環境や制度の整備などへの重要な示唆を得た。

第Ⅱ部では「研究成果の社会への還元は、市民にどのように配分されているか？」の問いをたて、来場者の学歴と過去の慣習的行動（特に文化資本への接近）についての相関をアンケート調査した。文化資本は大別して科学文化（科学博物館、科学講演会、科学雑誌、科学番組）と文学・芸術文化（クラシック音楽、美術館、小説や歴史、伝統芸能）があるが、一般には学齢期の子どもを連れての参加が多く、文化資本に対する慣習的行動は強いが、科学文化、文学・芸術文化双方に同じ程度の比重があった。科学研究機関だといっても、文化・芸術文化に親しむ人間の参加が多いのである。さらに、高学歴の親の方が子どもを連れてくる傾向が高いのが特徴的である。この結果から、公的科学的機関のアウトリー

チ活動は、科学ばかりではなく文学・芸術にも視点を向け、より広い市民層へ浸透するための工夫が必要であることが示唆された。

博士論文の審査結果の要旨

学位申請者加藤直子は、「科学と社会」の研究の一環として、大学共同利用機関で代表される公的科学研究機関の組織目的として、①科学的成果を出すこと、②その成果を社会に還元することと捉え、①においては科学研究者の人的資源管理（組織行動論）の観点から、研究者個人およびプロジェクトチームが成果を挙げていく規程要因を職務満足感のというキーワードで定量的に解析し、②においては公的科学研究機関のオープンキャンパスを通じて行うアウトリーチ活動に焦点を当て、アンケートを通じて得た参加した市民の意識や感想を消費者行動論から科学コミュニケーションの条件を明らかにする、という研究を行った。職務満足感と職務達成は、いずれの機関や研究現場において重要なテーマであり、研究者の個々のレベルと集団双方についての重要な因子（創造的成果、リーダーシップ、研究資源）を定量的に明らかにしたことは高く評価できる。本論文は科学と社会に関わる新領域を開拓したものとして、その意義が高く評価され、審査委員は一致して博士学位に値すると判断した。